

俳句の部選評

俳人

堀本 裕樹

第二十四回全国高校生創作コンテストに応募してくださった皆さん、ありがとうございます。今回はこの状況のなかで応募数が少し減ったものの、いつにもましてレベルの高い作品が多かったことが嬉しかったです。

では、入選を果たした句を観ていきます。

鈴虫や畳の上の回覧板

最優秀賞の濱口美咲さんの作品。季語は「鈴虫」で秋。日常の何でもない風景を切り取っており、何一つ大げさな表現や誇張したものが見受けられません。そこがこの句の魅力です。上で「鈴虫や」とその鳴き声を詠嘆しています。「鈴虫がリーンリーンと鳴いているなあ」と。それから視点が「畳の上」に移されて「回覧板」を映し出すのです。上五は聴覚、中七・下五は視覚が活かされています。鈴虫が鳴くなか、お隣から回ってきた回覧板が畳の上に置いてあるだけの風景に読み手は何を感じるでしょうか。私は日常の暮らしの尊さを感じます。平和な光景の一コマといってもいいでしょう。しかしながら、私はそこに新型コロナウイルスの蔓延と

不安も感じました。回覧板には町内の情報が載っていますが、さまざまな行事が中止になったという報告がなされているのです。一見日常に見えますが、「回覧板」を開けると、非日常が現れる。それがこの句のさりげない深みなのです。

東へと翅一枚の蜂が這う

優秀賞の鈴木瑠華さんの作品。季語は「蜂」で春。「翅一枚」になった蜂が東に向かって一生懸命に這っています。いったいどこに向かっていのでしょうか。傷ついた蜂に目を留めて詠んだ作者自身の心情が、この小さな生き物に託されているようにも見えました。飛べなくなっても這ってでも前に進もうとする蜂に鼓舞されながら、自分を見つめ直しているように思える一句です。

さよならは詩語に成り果て冬木立

優秀賞の勝井七海さんの作品。季語は「冬木立」で冬。「詩語」とは詩や韻文に用いる言葉の意味ですが、「さよなら」はもうそれに「成り果て」たというのです。その表現がこの句の寂しさと言得力につながっています。確かに日常的に「さよなら」ということはあまりなくなると気づかされます。「バイバイ」や「じゃあ、また」と言うほうが多いでしょう。「さよなら」は詩語のごとく儂い美しさを孕んだ言葉だなと、この句を読んで思いました。冬木立の凛と

した空気のなかで「さよなら」の響きと意味を捉え直している光景です。

佳作の横溝さんの句は、マスクを洗濯しながらこの状況が終息することへの祈りがあります。山本さんの句は、トマトの熟れた色を質感の違う「本塗り」の比喩で見事に捉えました。田中さんの句は、「青空に殴らるる」という諷刺的な擬人法が強烈に効いています。永松さんの句は、弓道の弓を引くときの静けさが、よく伝わってきました。鈴木さんの句は、祖母の徘徊を描きつつ優しさを感じました。「緑陰へ」の下五に救いがあります。

● 堀本 裕樹 (ほりもと・ゆうき)

俳人。一九七四年和歌山県生まれ。俳句結社「蒼海」主宰。俳人協会幹事。國學院大學卒。第2回北斗賞、第36回俳人協会新人賞受賞。二松學舎大学非常勤講師。2019年度「NHK俳句」選者。著書に『桜木杏、俳句はじめてみました』（幻冬舎文庫）、『NHK俳句 ひぐらし先生、俳句おしえてください。』（NHK出版）、『漫画家・ねこまぎとの共著『ねこまぎぞく』（さくら舎）、『俳句の図書室』（角川文庫）、芸人・又吉直樹との共著『芸人と俳人』（集英社文庫）、句集『熊野曼陀羅』（文學の森）などがある。